

# 雪の塔

夢野久作

青空文庫



玉雄と照子は兄きょうだい妹まいで毎日仲よく連れ立って、山を越えて向うの学校に通って、帰りも仲よく一所になって帰って来ました。或る日、二人はいつもの通り学校から手を引き合って、唱歌をうたいながら帰りがけ山道にかかりますと、真暗な空から雪がチラ降り出して、見ている内に道が真白になりました。

二人は唱歌を止めて急ぎましたが、雪はだんだん激しくなるばかり。しまいにはあととも先も見えず、どこが道やらわからなくなりました。だんだん山深く迷い入って行きました。

そのうちに日が暮れて、寒い風がヒューヒュー吹きはじめました。二人はお腹が空すいた上に寒ひやさに凍こえて、

「お父さん」

「お母さん」

と泣き叫びながら肩を組んで行きましたが、とうとう二人とも雪で動けなくなつて、雪の上に座つてしまいました。もう泣く声も出ず息も凍つてしまいそうで、只夢ただのような氣持になりました。

その時に玉雄は、林の向うを風につれて雲のように吹き渦巻く雪の切れ目切れ目に、一つの高い高い真白な塔のようなものが天まで達とどく位立っているのを見付けました。その塔の処々には小さな窓があつて、赤や青や黄色や紫の美しい光がさしております。

玉雄は学校に行く途中、こんな塔が立っているのを一度も見た事がありませんでした。夢ではないかと眼をこすつて見ましたが、

矢張り本当<sup>やは</sup>に雪の中に立っているようです。玉雄は急に照子の肩をゆすつて、

「照ちゃん、御覧よ。ホラあんな高い塔が……あれ、窓から美しい光がさして……さあ早く行きましようよ、あそこまで」

けれども可哀そうに照子はもう死んだように横になって、只ぼんやり玉雄の顔を見ているばかりでした。

玉雄は一生懸命で照子を抱え起して、やっと背中に背負い上げて、膝まで来る雪の中を一足一足塔の方へ近寄りましたが、すぐ近くに見える塔がなかなか遠くて、いくら歩いても近寄られません。そのうちに玉雄は力が尽きて、

「助けて下さい」

と一声高く叫ぶと、そのまま照子と一所に雪の中に打ち倒れて  
了しまいました。

その声が聞こえたのかどうだかはわかりませんが、玉雄がたお  
れると間もなく、向うの白い高い塔の一番下の処の入り口が開い  
て、そこから大勢の人が出て来ました。見ると、それはどれもこ  
れも身体からだに薄い白い着物たった一枚着た若いお姫様のような人ば  
かりで、素足で雪の中を舞い踊りながら吹きまわる嵐につれて歌  
をうたっています。

「ふれふれ雪よ 春は近い

ふれふれ雪よ 冬はおわる

ふれふれ真白に ふり積れ雪よ

吹け吹け風よ 吹き卷け風よ

一夜のうちに 雪の塔を作れ

冬と春とが わかれを告げる

名残のかたみ 雪の塔をつくれ

冬は行く 春は来る

ふれふれ 雪よ

春は来る 冬は行く

吹け吹け 風よ

ふれふれ 吹け吹け

吹き渦 卷いて

天まで遠く 雪の塔を作れ

世界の人も 獣けものも鳥も

野山の草木も 気づかぬうちに

旭あさひの光りが 照らさぬうちに

一夜で出来て 一夜で消える

高い高い 白い白い

水晶のような 雪の塔を作れ」

こう歌っているうちに舞姫たちはだんだん玉雄と照子の方へ近づいて来て、二人のまわりをくるくるまわりながら、白い大きな蝶のように美しく踊りまわりました。

そのうちに大勢の舞姫は踊りながらだんだん二人へ近寄って来て、手に手に二人をかつり上げて上がったと思うと、そのまま踊りをやめて



雪の塔の中へ連れ込みました。

雪の塔の中はどんなにか寒いだろうと玉雄は思っていました。まるで違って春のように暖かです。舞い姫たちは二人を軽々と昇かつぎ上げたまま、梯子はしご段をだんだんに昇ありて行きます。

第一の室は青い光りに満ち満ちておりました。第二の室は赤い光りで照らされています。第三は紫、第四は黄色とだんだん上へ上ありて行って、とうとう真っ白い光りが真昼のように満ち満ちている一番高い大広間に来て、床の上に降おりました。

ここまで来るうちに二人ともすっかりあたたまって、着物まで乾かわいてしまいましたので、二人は床の上に下くだされると、唯驚おどいてしまつてあたりをキョロキョロ見みまわしました。

兄も妹も雪の塔の大きいのに驚きました。四方の壁も天井も床も銀のように輝いていて、大広間の天井や隅々には四季の花が眩まぼゆい位美しく咲いて、室の真中に天井から吊りさがった青白いランプの光りで照らされています。

ランプのまわりには餅もち花ばなや羽子板、ゴム鞠、運動具、おもちゃの船、車などがパイに吊され、どれを見ても欲しくない物は一つもありません。

室の正面には黄金のお太陽様ひさまと白金しろがねのお月様を祭ってあります。その前には、鉄の冠を戴いて、白い顔に黒い髯ひげを勢いきおいよく生やし、紺こんじょう青あおの着物を着た立派な冬の男神おがみと、緑色の髪に花の冠を戴いて、桃色の長い着物を着た春の女神とが座わっています。

その左右にはお釈迦様、イエス様、七福神、だるま達磨さん、しろうき鍾馗大臣、サンタクロース、桃太郎、金太郎、花咲爺、乙姫様や浦島太郎、熊、鹿、猪や兎なぞいうけもの獣や鳥やお魚や山水天狗、つるまむし、へのへのもへしなぞいうおなじみの連中が四方へずらりと居流れて、今宴会の最中でしたが、玉雄と照子のきょうだい兄妹が這入つて来ると、皆万歳と言つて歓迎をして、二人を正面の冬の男神と春の女神の前に座らせました。

二人は今までお話しには聞いていましたが、まさかこんなものが本当にいようとは思わなかつたので、何とあいさつしてよいやら、只胸をドキドキさして、顔を真赤にしてお辞儀をして座りました。

二人がここで頂いた御馳走は、何が何だかわからぬ位沢山で、丁度お腹は空いていたし、そのお美味いしかつた事、頬ぺたも落ちそうで、あとから出たお菓子や果物までも一つ残さず食べてしまいました。

御馳走が済むと五分間演説が初まりました。

いの一番に飛び出したのは真まつ黒くろくろ々の唐からかね金のお釈迦様でした。

「みなさん、私はいろいろな人から拝まれて、いろいろなおそなえものやお賽銭をたくさんいただきます。しかし私を拝んだり、いろいろなものを供えたりする人は、みんな欲ばりばかりで、私にすこしばかりのものをくれて、大変な幸福ばかり祈りますから、

私は知らん顔をしております。しかし毎年四月八日の私の誕生日になると、子供たちが大勢来て、私の頭の上を花で飾って、頭から甘茶をかけてお祝いをしてくれます。私はこんなに親切に可愛がってもらうと、うれしくてうれしくてたまりません。私は欲ばりの大人に拝まれるよりも、こんなに親切な子供達に可愛がられる方がよっぽどうれしゆう御座います」

皆はパチパチと手をたたいて、お釈迦様の演説に感心をしました。

その次にはイエス様が立ち上って演説をしました。

「私もお釈迦様と同じように誕生日クリスマスには子供たちに可愛がられます。しかし困った事には日本の子供は、私の誕生日を祝うこと

よりも私の家来のサンタクローズにいろいろのものを貰う方を楽しみにするようです。又も一つ困った事には、クリスマスの日には子供より大人の方が夢中になって、クリスマスツリーを飾ったり、クリスマスプレゼントを遣ったり貰ったりしますが、そのためによく子供の方がお留守になって、クリスマスの日になると、『うるさいからあっちへ行っていていらっしやい』なぞと叱られる事があります。私は可哀そうで可哀そうでたまりません。ふだん大人は忙しくてゆっくり子供と遊ばれぬ事が多いのです。しかしクリスマスの日だけは子供の日ですから、大人の人は一生涯懸命になって子供を喜ばすようにしてやって頂きたいと思えます」

皆は又も手を拍<sup>う</sup>って賛成しました。

お釈迦様とイエス様のお話が済むと、七福神が揃って飛び出して「七福踊り」というのを踊りました。これをはじめにして乙姫の「竜宮の舞い」、達磨大師の「コロコロ踊り」、花咲爺の「花咲踊り」、舌切雀の「雀踊り」、桃太郎の「剣舞」、金太郎の「力持ち」、けもの獣のダンス、鳥のダンスなどが次から次へ数限りなく、いつまで見ても面白う御座いました。

その一番おしまいには「へのへのもへし」「山水天狗」「つるまむし」の三人が手を引き合って飛び出して、へのへの踊りというのをやりました。そのうたはこうでした。

「へのへのもへしにつるまむし

山水天狗の三人は

生まれ故郷は知らねども

かしこやよこの白壁や

扉や窓に現われて

誰が描いたと睨まれる

描き散らかしたわるものは

私はちゃんと知っている

けれども云ったら大変だ

だから私はだまつてる

描いた坊ちゃん嬢ちゃんは



蔭の方からクスクスクス

赤い舌をペロペロペロ

父さん母さんおこ憤り出し

急いで消して終しまうけど

またそのうちに私等は

他の処にあらわれる

いくつもいくつもあらわれる

だれも消さないその時は

雨にたたかれ洗われて

次第次第に消えて行く

消えない間のおたのしみ

さあさあ踊らせ歌わんせ

山水天狗につるまむし

へのへのもへしのひとおどり」

この踊りの可笑<sup>おか</sup>しくて面白い事、お腹の皮が燃<sup>よじ</sup>れるようで、皆手を拍<sup>う</sup>つて喜びました。

踊りがすっかり済みますと、最前の舞い姫が又大勢現われて、二人を胴上げをするように昇<sup>か</sup>ぎ上げて、雪の塔の絶頂に登りました。

ここは屋根も何も無い広場で、四方の雪景色が一眼に見渡せま  
す。もうすっかり雪が晴れて、空にはダイヤモンドを数限り無く  
散らしたように星の光りが瞬いています。西の方に今しも満月が  
沈みかかり、青い透すきとおった光りを、見渡す限り、処々が埋も  
れた野や山や河や海や森林に投げています。その美しい事……。  
舞い姫たちは、兄きょうだい妹を席場の真中の一番高い処の台の上に  
立たせて、パノラマのような四方よもの景色を見渡させながら、雪の  
台のまわりを歌をうたつて踊つてまわりました。

「冬と春との神々の

今宵こよひひと夜のおわかれに

降らせた雪に埋もれた

可愛い仲好い 兄きょうだい 妹は

雪のしとねに雪まくら

夢路に遊ぶ雪の塔

お伽とぎばなし 噺でおなじみの

おもしろおかしい人たちと

仲よく遊んだよろこびも

今宵と夜のうつつぞと

夢にも知らぬあかつきの

光りに消ゆる雪の塔

野から山へと冬は去り  
海から野へと春は来る  
冬のゆくえを尋ねれば  
消えてあと無き雪の塔  
春のふるさと尋ねれば  
消えてあと無き雪の塔

あとには可愛い仲のよい  
兄と妹の夢がたり  
楽しく嬉しくなつかしく  
一夜のうちに消え果てた

## 「綺麗な綺麗な雪の塔」

こんな歌をおどりながら舞いめぐる舞い姫の姿は、次第次第にうすれうすれて消えて行きました。

白い着物を着た舞い姫たちが消え消えとうすくなつて行くと一所に空の星の光りもうすらいで、お月様もいつのまにか西へ落ちてしまつて、あたりが明るくなると思う間もなく、東の山の上にて紫の雲が一つ一つ湧き出して、右に左にゆらゆらとたなびき舞ははじめました。

きょうだい  
兄 妹

は夢のようになってこの美しい景色に見とれているうちに、だんだんと明るくなって、やがて東の山から真赤の太陽の光りが野にも山にも一面にサーツと流れました。

それと一所に舞い姫の姿はすっかりどこへかフツと消えてしまつて、あとにはただ玉雄と照子と二人だけ残りました………  
………と思う間もなく、太陽の光りに照らされた雪の塔は見る見るうちに溶け出して、ユラユラと二三遍動いたと見る間に、根元からドタドタドタと一度に崩れ落ちてしまいました。

「アツ」

「助けて」

と叫んで玉雄と照子が時々眼をさましますとコハ如何に、二人はあたたかい寢床の中に寝かされて、お父さんとお母さんが心配そうに介抱しておられました。

二人が眼をさましたのを見ると、お父さんとお母さんは一時に

二人を抱き締しめて喜ばれました。そうしてこう云われました。

「まあ、お前達はよく助かつてくれたね。お前達が帰りが遅いので、お父さんとお母さんはお迎えに行つたけれども、雪が降つてわからない。それから村中の人を頼んで探してもらつて、やっと杉林の中で抱き合つてたおれているお前達を見つけたのだよ。私達はお前達が死ぬかと思つてどれ位心配したか」

と云ううちにお母さんは嬉し涙をこぼされました。

その時にお父さんはこう云われました。

「それにしても不思議な事がある。お前達がまだ眼を醒まさないうちに、お前達はさも面白そうに嚙うわごと語を云つたり、手をたたいたりしていた。それが二人とも丁度同じ夢を見ているように、同



じ時に手をたたいたり面白がったり、巧うまい巧いと云ったりしていた。一体お前たちはどんな夢を見ていたのか。お父さんに聞かしてくれないか」

玉雄と照子は寢床の中で顔を見合わせて、不思議そうに眼をまん丸くしました。



# 青空文庫情報

底本：「夢野久作全集」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年5月22日第1刷発行

※底本の解題によれば、初出時の署名は「海若藍平《かいじやくらんぺい》」です。

入力：柴田卓治

校正：もりみつじゅんじ

2000年3月6日公開

2006年5月3日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 雪の塔

夢野久作

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>